

2025年度
常磐大学 一般選抜 II期
入学試験問題

国語

— 注意事項 —

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
2. 試験開始の合図のあと、問題冊子および解答用紙のそれぞれに受験番号と氏名を必ず記入してください。
3. この問題冊子の総ページ数は、12 ページです。
4. 問題は、I と II です。
5. 試験開始の合図のあと、ページ数を確認し、ページが抜けている場合や、印刷が不鮮明な場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
6. 解答は、必ず解答用紙の所定の欄に記入し、解答用紙の余白には何も書かないでください。
7. 問題冊子の余白は適宜利用して構いません。
8. 解答用紙は、原則として交換しませんので、傷めないように注意してください。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

I 次の文章を読み、以下の問に答えなさい。

オノマトペによる最初の記号接地

そもそも子どもは、何ひとつ言葉を知らない状態から、言葉をどのように学んでいくのでしょうか。

少なくとも最初の「言葉」は「身体」に「接地」していなければなりません。この「言葉」と「身体」の最初の関わりを考える上で鍵を握るのが、「オノマトペ」です。

オノマトペとは、「げらげら」とか「もぐもぐ」とか「ふわふわ」といった、音や物事の状態や動きなどを音で象徴的に表した言葉のことですが、日本語にはとくに多いことが知られています。『言語の本質』の共著者である秋田さんは、このオノマトペの世界的な研究者です。

オノマトペ研究は、言語学の分野で長らく「マイナーな研究」という扱いを受けてきましたが、「言語の起源」と「言語習得の謎」を同時に明らかにするものとして、いま世界的に注目されています。

一般的に、言葉(単語)は、その音から意味を推察できません。しかしオノマトペは違います。「トントン」と「ドンドン」、「チョコチョコ」と「ノシノシ」など、それぞれの単語の音と意味はつながっています。つまり、オノマトペを通して「言葉(音)」と「身体」の最初の「接地」が起る。このように音と意味が自然につながっていて、それを赤ちゃんでも感じられるからこそ、オノマトペは、言葉への入り口となるのです。

名づけの洞察

ただ、赤ちゃんが「すべてのモノには名前がある」ということに気づくには、実は「大きな飛躍」が必要となります。音声の言葉にはそれぞれ指し示す対象があるという「名づけ」は、大人にとっては当然のことですが、赤ちゃんにとっては、その気づき自体が「偉大な洞察」に匹敵するのです。

視覚と聴覚を失くしたヘレン・ケラーは、手のひらに冷たい水を受けながらサリバン先生に「water」と指文字で綴ってもらったときに、「その指文字とは手のひらに流れる冷たい液体の名前なのだ」という「啓示」を得ました。

それ以前にもヘレンは、モノを手渡される度にサリバン先生の指が別々の動きをしていることに気づいていました。しかし、彼女は手で触れる

サリバン先生の指文字の形がその対象の「名前」だということには気づいていなかったのです。それまでも、指文字を覚え、対象を手渡されれば指文字を綴ることはできていましたが、後にそれを「猿真似だった」と回想しています。ヘレンは、「water」という綴りが名前だということに気づいたとき、「すべてのモノには名前があるのだ」という閃きを得たのです。この閃きが「名づけの洞察」です。

この「名づけの洞察」こそが、言語習得の大事な第一歩となります。

A Iと赤ちゃんの学習の仕方

そもそも人間とA Iの大きな違いは、その学習の仕方にあります。

A Iの学習は、最初に膨大な言語データを与えられるところから始まります。そこからデータの統計的な規則性を抽出し、この言葉の後にはこの言葉がふさわしい、という情報処理をしながら文章を生成します。

一方、人間の赤ちゃんには大量の言語データを処理する力はありません。それでも、自分の身体感覚に結びついたほんの少しの知識から、新たな知識をつくつたり、修正したりすることで、知識体系を大きくしていきます。これが可能なのは、赤ちゃんにはA Iにはない「**X**する力」があるからです。

子どもが言葉を覚えられるのは、「大人が間違いを直すからだ」と思っている人も多いでしょう。しかし、実際には、大人が赤ちゃんの言葉の誤りを訂正することはめつたにありません。親は赤ちゃんが誤った発話をして、大抵の場合、子どもの意図を汲みとって子どもの言っていることに応答しているからです。

赤ちゃんは言葉を学習する最初の時点では、言葉に関する知識をほとんどもっていません。にもかかわらず、あつという間に多くの単語を覚え、文法を覚え、話ができるようになります。それは、子どもが新しい言葉を覚えた後、少し間違っただけでも、別の場面でその言葉を使おうとするからです。(1)、子どもは、たった一つの事例から、言葉の意味を自分で見極め、さらにその言葉の使える範囲もその場でおおよそ判断しているのです。

私たちの実験でも、幼児は、モノの大きさ、素材、色だけでなく、形を基準にして「一般化」(≡類推)していることがわかります。たとえば、幼児が知らないモノに新奇な名前(「ネケ」)をつけ、①名づけられたモノと形もその他の特徴(大きさや模様)もそっくりのモノ、②形は似ているがほかの特徴は異なるモノ、③形もその他の特徴もまったく異なるモノを見せ、「ネケはどれ？」と聞くと、二歳児でも躊躇なく、もともと「ネ

ケ」と名づけられたモノや、①形とその他の特徴を共有しているモノだけでなく、②形は似ているが他の特徴は異なるモノも、「ネケ」の対象として選ぶのです。それは「言葉は形が似ている他のモノにも使える」とわかっているからです。

そして幼児は、語彙が増えるにしたがって、モノの「形」だけでなく、「卵から生まれる」や「お母さんのお腹の中で育ってから生まれる」などの「内的な性質」にも気づくようになり、知覚的な類似性^③だけでなく、抽象的な関係性など、もともとは「似ている」と思わなかった概念にも類似性を感じるようになります。

^B こうした「推論」によって知識を増やしながら、同時に「学習の仕方」自体も学習し、自律的に成長し続けるのが、言語習得のプロセスです。A Iの「学習」とはまったく異なるのです。このような仕組みがあるからこそ、子どもはほとんど知識を持たない状態から始めても、自分の持っているリソース（感覚・知覚能力・推論能力）^④を駆使して、短期間で巨大な知識のシステムを身体の一部として自分のものにしていく（記号接地していく）ことができるのです。言語習得とは、決して「経験の丸暗記」によるものではありません。ここで少し立ち止まって、「推論」とは何かを改めて考えてみましょう。

知を生むアブダクション推論

論理学では「推論」は、「演繹推論」と「帰納推論」に分けられます。

演繹推論は次のようなものです。

- ①この袋の豆はすべて白い（規則）
- ②これらの豆はこの袋の豆である（事例）
- ③ゆえに、これらの豆は白い（結果）

帰納推論は次のようなものです。

- ①これらの豆はこの袋の豆である（事例）
- ②これらの豆は白い（結果）
- ③ゆえに、この袋の豆はすべて白い（観察からの一般規則の導出）

この演繹、帰納に加えて、哲学者のチャールズ・サンダース・パースは、「仮説形成推論（アブダクション abduction）」という推論形式の存在を

指摘しています。

- ①この袋の豆はすべて白い（規則）
- ②これらの豆は白い（結果）
- ③ゆえに、これらの豆はこの袋から取り出した豆である（結果の由来を導出）

この三つの推論のうち、常に正しい答えを導けるのは、演繹推論です。アブダクション理論は、そもそも「仮説」にすぎず、帰納推論も「すべてのXはAである」という一般化をしても、AでないXが一事例でも見つければ論理的には偽になってしまふからです。しかし、常に正しい演繹推論は、新たな知識は創造できず、新しい知識を生むのは、帰納推論とアブダクション推論のほうなのです。

観察される部分を全体に一般化するのが帰納推論であるのに対し、観察データを説明するための仮説を立てるのがアブダクション推論です。たとえば帰納推論では、物体は支えがないと落ちるといふ結論は導き出せても、「重力」という概念は導き出せません。これに対して、アブダクション推論では、なぜ支えられていないモノが落下するのかという現象を説明するために「重力」といふ仮説を立てることが出来ます。つまり、直接には観察不可能な何かを仮定し、直接観察したものと違う種類の何かを推論するのが、アブダクション理論です（ただし厳密には、この二つの推論の境界は曖昧で、アブダクションによる仮説の提案なくしては、帰納はその役割を果たせない、つまりまず何らかの仮説がないと事実を集められず、二つの推論は連続し、混合しています）。

赤ちゃんは推論の天才！

実は、人間の赤ちゃんは、言葉を学ぶ過程で、帰納推論とアブダクション推論を驚くほど駆使しています。それを教えてくれるのが、思わず微笑みたくなるような、赤ちゃんのかわいらしい「言い間違い」です。これは、「知性の未熟さ」どころか、赤ちゃんが「創造的な知性」をもっていることの証しなのです。

〔ピッチャー、キャッチャーを踏まえ、バッターのことを「バッチャー」と言う〕

これは朝日新聞の読者投稿欄「あのね」にあったエピソードですが、人の役割名に共通する終わり方（接辞）があることを観察し、それを幼児がすかさず一般化した例です。

へおばあさんがお客様にお茶を出すときに「粗茶ですが」というのを聞いて、自分のネコを抱えてお客さんに見せながら「ソネコです」と言う〕

これも「あのね」からですが、三歳の子どもは「なんでお茶じゃなくてソチャなの？」とおばあさんに聞き、お客様には「ソ」をつけるのよ、と聞いたらすかさず、自分のネコを紹介するときに応用したわけです。

以下の例は、アブダクション推論による「言い間違い」です。

① 「イチゴのしょうゆ」（練乳の意）

② 「足で投げる」（蹴るの意）

どちらの例も、「知覚的な類似性」だけでなく、「関係の類似性」や「構造の類似性」を見抜く力が幼児に備わっていることを示しています。①の例では、しょうゆと練乳という色も香りも味も違う二つの液体が、「食品にかけて味をおいしくする」という視覚的にはわからない機能の類似性をもっていることに幼児が気づいています。②の「投げる」と「蹴る」の共通性も、視覚的には気づきにくい類似性です。

こういう推論は、いくらデータが大量にあっても、AIは絶対にはしません。わずかな事例から過剰に一般化しては、もちろん間違いも犯すのですが、赤ちゃんは、わずかな事例をもとに過剰一般化する「推論力」をもっているからこそ、こんなに早くに言葉を覚えられるのです。

正しくない推論が言語を可能に

(2)、そもそも人間は、「論理的には正しくない推論」をするからこそ、言語を習得できるのだと言えます。

たとえば、人間の子どもは、黄色い積み木は「KIRO」であると教えられると、「KIRO」という音は黄色い積み木を指すとか、赤くて丸い果物は「RINGO」であると教えられると、「RINGO」という音は赤くて丸い果物だと考えます。

しかし、この一般化は論理的には正しくありません。「A（ペンギン）ならばX（鳥）」は、「X（鳥）ならばA（ペンギン）」と同じではないからです。

京都大学の霊長類研究所で行われた実験によれば、チンパンジーは「黄色い積み木は△、赤い積み木は◇」と学習できたとしても、「△は黄色い積み木、◇は赤い積み木」とは選べません。(3)、チンパンジーの判断の方が論理的には正しいのです。それに対して人間は、言語習得の際、対象↓記号の対応を学習したら、記号↓対象という対応も同時に学習するというように、論理的には正しくない過剰一般化を行うのです。

人間はあることを知ると、その知識を過剰に一般化します。こうした非論理的で誤りを犯すリスクもあるアブダクション推論こそが、人間の言語習得と科学の発展を可能にしてきましたと言えます。アブダクション推論は、ヒト以外の動物種は、ほとんどしません。人類だけがなぜ言語を持つ

たのか、その答えの一つがここにあるように思えます。

この本で書きたかったのは、「言語の本質」ですが、同時に「知識とは何か」をも問おうとしたので、千葉雅也さんや鹿島茂さんなど、名だたる思想家から「面白い」と評価していただいたのは、とてもうれしいことでした。

とはいえ、本書で私が用いているのは、高校生レベルの語彙だけです。それこそ自分で「接地」していない言葉は怖くて使えないからです。

この場合の「接地」とは、私にとっては「実験にもとづいている」ということです。実験をしているからこそ、ある程度自信を持って書ける。ただ赤ちゃんを対象に実験するのは本当に大変です。アイデアはすぐに浮かんでも、うまくいくまで一〇年ぐらいかかりたりします(笑)。本書がこういう地道な実験の積み重ねの上にあることも、知っていただけなら、とてもうれしいです。

(出典 今井むつみ「赤ちゃんはAIより天才だ!」『文藝春秋』第101巻第9号 文藝春秋 2023年)

問1 二重傍線部①②の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問2 傍線部Aと類義の言葉としてもっとも適切なものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

ア ルール イ タイトル ウ メンタル エ シンボル

問3 空欄(1)～(3)に入るもっとも適切な言葉を次のア～オからひとつずつ選び、記号で答えなさい(重複不可)。

ア かりに イ しかし ウ つまり エ また オ 実は

問4 空欄Xに入る言葉としてもっとも適切なものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 検討 イ 推論 ウ 表現 エ 判断

問5 傍線部Bについて、正しく述べたものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア AIは最初に膨大な言語データが与えられ、それを統計処理することにより文章を生成している。
- イ AIは最初に膨大な言語データが与えられ、それを推論処理することにより文章を生成している。
- ウ AIはインターネット上の膨大な言語データから確実性のあるデータを見出して、文章を生成している。
- エ AIは自律的に膨大な言語データを収集し、それを統計処理することによって規則性を見出し、新たな知識を獲得している。

問6 傍線部Cについて、その理由を説明したものとして最も適切なものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもが言語習得するプロセスにおいて、大人が様々な場面で間違いを修正してくれるから。
- イ 子どもは言語習得を行う中で少し間違っている、別の場面でその言葉を使おうとするから。
- ウ AIとは異なり、子どもは「内的な性質」によってより成長し、モノの特徴を把握するから。
- エ AIとは異なり、子どもは「推論」や「学習の仕方」によって、自律的に成長し続けるから。

問7 傍線部Dについて、その理由の説明として最も適切なものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア 演繹推論は、現象を説明するために、仮説をたてることがないから。
- イ 演繹推論は、結果に基づいて一般的な規則を導いているに過ぎないから。
- ウ 演繹推論は、時として誤りを導き出す可能性があるから。
- エ 演繹推論は、事例とその結果を観察して一般的な規則を導き出しているから。

問8 傍線部Eについて、幼児がどのような過程を経て「バッチャー」と言ったと考えられるか。本文の内容に即してその過程が適切になるようにア〜エを並べ替え、その順序を記号で答えなさい（完答のみ正解）。

ア 人の役割名には共通する終わり方がある。

イ 共通の終わり方は「チャー」である。

ウ 投げる人はピッチャーといい、捕る人はキャッチャーという。

エ 打つ人は「バッチャー」である。

問9 傍線部Fについて、なぜ作者はアブダクション推論こそが人間の言語習得と科学の発展を可能にしてきたと考えているのか。本文の内容を踏まえ80字程度で答えなさい。

問10 本文の内容に合致するもつとも適切なものを次のア〜オからひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 人間の赤ちゃんは大量の言語データを処理する力を持ち、自分の身体感覚に結びついたほんの少しの知識から、新たな知識をつくったり、修正したりすることで、知識体系を大きくすることができる。

イ AIはほとんど知識を持たない状態から始めても、自分の持てるリソース（感覚・知覚能力・推論能力）を駆使し、短期間で巨大な知識のシステムを自分のものにしていく存在である。

ウ 観察される部分を全体に一般化するのが演繹推論であるのに対し、観察データを説明するための仮説を立てるのがアブダクション推論である。ただし、厳密には両者は連続し、混合していると言える。

エ AIはわずかな事例から過剰に一般化することはないが、赤ちゃんはそれをするによって間違いを犯しつつも、帰納推論とアブダクション推論をして言語を習得する。

オ AIは言語習得の際、論理的には正しくない過剰一般化を回避するが、非論理的で誤りを犯すリスクもある演繹推論を実装することにより、人間とは異なる言語習得と科学の発展を可能にしたと言える。

II 次の文章を読み、以下の問に答えなさい。

ゆとり世代といかに接するべきか

日本能率協会が実施している新入社員意識調査には、理想の上司像をタズねた設問がある。その近年の回答を見ると、仕事について丁寧な指導をする上司の人氣が高く、仕事を任せて見守る上司の人氣は低い。

ところが現在の上司に同じ質問をすると、まったく逆の回答が得られる。おそらく現在の上司は、かつて自分たちが若かった頃に、上司を鬱陶しい存在と感じていたからだろう。

ここに世代間の意識の大きな《 A 》がある。端的に言えば、今日の若者には、上司や仲間から「見られているかもしれない不満」よりも、「見られていないかもしれない不安」のほうが強いのである。

社会的動物である人間は、他者からの承認によって自己肯定感をハグクみ、維持していく存在である。その機序は昔も今も変わらないだろう。ただし、个性的であることが憧れでありえた時代に私たちに強力な承認を与えていたのは、社会的な理想や信念といったいわば抽象的な他者だった。その評価の基準は普遍的で安定しており、いったん内面化された後は人生のラシンバンとして機能しえた。

それに対して今日では、社会が後景化して抽象的な他者の《 B 》が失われた結果、身近な周囲にいる具体的な他者の評価が前面にせり出している。しかもその評価の基準は、場の空気次第で大きく揺れ動いてしまう。そのため都度ごとに相手の反応を探りあわなければならなくなっている。

今日の若者たちがゆとり世代と呼ばれ、その生き方が生ぬるいと批判される理由もここにある。確かにこの世代の人たちは、ががつとした《 C 》な生き方を「意識高い系」や「ガチ勢」と呼んで揶揄したりする。

しかしそれは、一人だけが頑張つて周囲から浮いてしまうと、コミュニケーション能力のケツジョした空気が読めない人物と看做されかねないからである。逆に言えば、みんなと一緒に頑張つているときに一人だけがタイダなもの、今日ではかつて以上に嫌われる。

「そんなことやつてられねえよ」と、X態度が不良的で格好よく見えた時代もあつたが、今日ではまったく事情が異なっている。優等生が増えたように見えるのもそのためである。良くも悪くも周囲から目立つことは、自分の居場所を不安定にすることであり、ともかくご法度なのである。

問4 波線部②について、その意味の説明としてもっとも適切なものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア 忘れないように心に刻んでおくこと
- イ ひどい腹立たしさを感じ続けること
- ウ 悔しさを忘れないように心に刻むこと
- エ 人生の大事な瞬間を心に刻むこと

問5 空欄 **X** には「物事に正面から対処しないで、皮肉な態度で臨む」という意味の語句が入る。当てはまる正しい語句を次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア 横柄な
- イ 卑下した
- ウ 斜に構えた
- エ 色眼鏡をかけた

問6 傍線部(あ)について、この時代や世代を象徴している内容として正しいものを次のア～エからすべて選び、記号で答えなさい。

- ア ゆとり世代
- イ 「意識高い系」や「ガチ勢」
- ウ 優等生
- エ 丁寧な指導をする上司
- オ 普遍的で安定した評価基準